

## 資料

## 沖縄に暮らす高齢者の排泄に関する意識調査

徳田真由美<sup>1§</sup>, 辻村真由子<sup>2</sup>, 石垣和子<sup>1</sup>

## 概要

本研究の目的は、沖縄に暮らす高齢者の排泄に関する意識を調査し、文化を反映した排泄への看護援助のあり方を検討することである。沖縄の高齢者15名を対象とし、排泄に関する意識について半構造化面接法による聞き取り調査を実施した。その結果、便・尿とは、【出すべき物である】【神に感謝する】【健康状態がわかる】【気分が爽快になる】【衛生的に汚い】【汚くない】【人に見られたくない】という多様な意味が抽出された。沖縄に暮らす高齢者にとって、排泄とは、心身の状態や、神や人との関係性により考えられているものであることが示唆され、高齢者の排泄に関する考えを形成する文化を理解しながら、その考えを尊重した看護をしていくことが重要であると考えられた。

キーワード 高齢者、排泄、文化、意識、沖縄

## 1. はじめに

人は、幼少期に家族等に教えられて排泄習慣を身につけ、その後、排泄の営みを人に見られずに自分で行っていることが多い。在宅においては、疾患や高齢等の何らかの理由により、排泄に問題が生じた場合には訪問看護師が援助を行うことが多い。人が生活していく過程で、継続的・習慣的なケアは欠かすことなく続いており、自立している人々は自分自身でこれを行い、このリズムが乱れたり、方法の維持ができないときは、それだけで苦痛や戸惑いを感じるものである<sup>1)</sup>。排泄ケアは、本人のペースで行う必要があり、食事や入浴のようにケア側の都合で時間を調整することが難しい、回数が他のケアよりも多い、排泄物は衛生的な問題を起こしやすい等の特徴があり、排泄ケアの影響の大きさや困難さがある<sup>2,4)</sup>。以前に排便に援助を必要とする在宅要介護者とその家族を対象とした研究において、排便の方法・場所・時間の希望、排便習慣、排便の意味、排便の介護・援助に対する気持ち・考え等が実現できなくなり、現実との折り合いの問題が生じており、排便に関する価値観を中核として状況を把握することが重要であることが示唆された<sup>5)</sup>。身につけた排泄の習慣に変化を来した時、看護が現象だけに対応しようとするれば対象との間にズレを生じてしまい、文化的に理解する必要がある<sup>6)</sup>。

排泄の文化的考察<sup>7,9)</sup>をした研究や、看護師の排泄ケアの看護実践知を身体性の観点から分析し

た研究<sup>10-12)</sup>等はあるが、高齢者自身の排泄に関する意識を調査した報告はほとんどない。

沖縄は、日本の最南端にあり、かつては琉球王朝であり、東南アジアやアメリカなどからも文化的影響を受けながら、変遷、発展してきた。日本の排泄援助を検討していく際には、文化の異なる可能性のある地域における状況を理解する必要があると考えるが、沖縄はその一つである。沖縄のトイレの様式は、戦前は、フル（トイレと豚小屋が兼用になったもの）、戦後は、汲み取り式トイレ、和式トイレ、洋式トイレと変遷してきた<sup>13)</sup>。このような変遷を経験してきたのは高齢者である。

そこで、本研究の目的は、沖縄に暮らす高齢者の排泄に関する意識を調査し、文化を反映した排泄への看護援助のあり方を検討することとした。

## 2. 方法

## 2.1 対象

研究対象は、沖縄県内のA市において、了解の得られた地域に在住する高齢者15名であった。A市は、台地から海に面した平野部にあり、海外との交流拠点となり、政治・経済・文化の中心地である。人口は沖縄では多い方で、人口増加がみられ、高齢化率は16%を超えている。

## 2.2 倫理的配慮

A市総合福祉センターの管理者及び利用者または職員に対し、研究の目的・意義・方法について、

<sup>1</sup> 石川県立看護大学 <sup>2</sup> 千葉大学大学院看護学研究科

<sup>§</sup> 責任著者

文書と口頭にて説明をして承諾を得た。また、調査で知り得たことを本調査以外に使用しないこと、個人が特定されるようなこと・不利益になるようなことはしないこと、断ることもできることを説明した。

### 2.3 調査方法

研究参加に同意した対象者に半構造化面接法による聞き取り調査を実施した。調査内容は、属性(年齢、性別、家族構成、職業)、健康状態、排泄及び排泄の世話に関する考え、排泄に関する歴史の変遷、排泄に関する世代差についてである。面接内容は対象者の希望に添い、テープ録音あるいは記録をした。聞き取り調査はプライバシーの保たれる場所で、1人30～60分程度で行った。調査期間は2006年3月であった。

### 2.4 分析方法

本研究では、調査内容のうち、排泄に関する考えのなかの「便・尿とは」について分析の対象とした。テープ録音および記録した面接内容を逐語録に起こし、「便・尿とは」に関する考えを抽出し分類・整理した。分析については、質的研究の実績のある共同研究者で検討をした。具体的内容を整理したものを小分類とし、それを中分類に分類・命名し、さらに大分類に分類・命名した。文章中に示す際には、大分類は【 】, 中分類は<>, 小分類は「 」で示す。

## 3. 結果

### 3.1 対象の概要

表1のとおり、対象者の年齢は、60歳代後半7名、70歳代8名であり、男性7名、女性8名であった。家族構成は、同居家族がいる人が12名であり、その内訳は、配偶者6名、配偶者と子ども4名、子ども1名、孫1名であった。同居家族がいない人は3名であった。職業がある人は6名、ない人は9名であったが、地域の役員をしている人もいた。

### 3.2 便・尿とは

便・尿とはどのようなものかについて語られた内容を表2にまとめた。【出すべき物である】【神に感謝する】【健康状態がわかる】【気分が爽快になる】【衛生的に汚い】【汚くない】【人に見られたくない】の7つが抽出された。

便・尿は、「出ないと困る物」「出ることが大事」

表1 対象の概要 n=15

項目	人数	
年齢	60歳代後半	7
	70歳代	8
性別	男性	7
	女性	8
家族構成	同居家族あり	12
	・配偶者 6	
	・配偶者・子ども 4	
	・子ども 1	
	・孫 1	
	同居家族なし	3
職業	あり	6
	・清掃業 3	
	・飲食業 2	
	・相談員 1	
	なし	9
	・元教員 3	
	・元看護職 1	
	・民生委員 1	
	・老人クラブ役員 1	
	・自治会関係者 1	
・なし 2		

「廃棄物なので出さないとだめである」「便がたまるとがんになるので出したほうがよく、いつも便には気を使っている」「便や尿は生理的現象だから何の抵抗もない」等の【出すべき物である】という考えが基本にあった。また、「トイレの神様に感謝しながら排便する」「トイレは感謝して入る所である」「尿や便が出たのが有難いと神に感謝する」という【神に感謝する】考えがあった。

「健康のバロメーターである」「健康の基である」等の【健康状態がわかる】ものであり、「便がさっと出ると気持ちがよく、今日も健やかに過ごせる」等の【気分が爽快になる】という心理的な効果が得られるものであった。

「排泄をする場所は汚い所というイメージがある(戦前は蠅やうじ虫がいるのが当たり前だった)」という【衛生的に汚い】物である考えがあ

表2 便・尿とは

大分類	中分類	小分類
出すべき物である	出すべき物である	出ないと困る物／出ることが大事／廃棄物なので出さないとだめである／体の中を掃除してくれるから出るべき物は出した方がよい／入れた物は出すべきであり、便秘は考えられない／便がたまるとがんになるので出したほうがよく、いつも便には気を使っている／出さないと大きくなる／便を我慢するとお腹が張ったような感じでガスがどんどん出るが、排便をちゃんとしていると出ない
	生理的現象である	便や尿は生理的現象だから何の抵抗もない
神に感謝する	便や尿が出ることを神に感謝する	トイレの神様に感謝しながら排便する／トイレは感謝して入る所である／尿や便が出たのが有難いと神に感謝する(出なくなったら病気になるので、出ていることの今日の健康に感謝する)
健康状態がわかる	健康状態がわかる	健康のバロメーターである／健康の基である
	便は食べ物によって影響される	食べ物によって左右される(毎日出る人の便はあまり腐ったにおいがしない、玉葱やにんにくを食べた時とバナナを食べた時とにおいが全然違う、バナナを食べると便が割と大きいのがすんなり出る)
気分が爽快になる	気分が爽快になる	便がさっと出ると気持ちがよく、今日も健やかに過ごせる／気分が爽快になる／渋滞のときにトイレで尿をするとスカッとする
	便秘の時は気が落ち着かない	便秘のときに薬を飲んで便が出るとすっきりするが、便秘の時は気が落ち着かない
衛生的に汚い	排泄をする場所は汚い	排泄をする場所は汚い所というイメージがある(戦前は糞やうじ虫がいるのが当たり前だった)
汚くない	他人の便・尿は汚いが、自分の便・尿は汚くない	人のは汚いが、自分や子どもの物は汚いと思わない／人のは嫌である
	汚くない	便や尿は汚くない
人に見られたくない	人に見られたくない	人に見られたくない／トイレに入ったらドアを必ず閉める、外で排泄するのは気兼ねする／大便是自分のトイレ以外ではあまりしたくなく、朝もよおさないと気になり、外出できない／便・尿は、人に迷惑にならないように流しながらする／ちゃんとした硬い便であればそんなに恥ずかしいと思わないが、下痢の状態では人に見せたくない
	人の世話になりたくない	人の世話になりたくない／オムツを当てられるのは年を取ったら避けて通れないが、できるだけ便や尿の世話にならないように頑張る

る一方で、「人のは汚いが、自分や子どもの物は汚いと思わない」「人のものは嫌である」「便や尿は汚くない」という、汚さについて相反する考えがあった。

「人に見られたくない」「トイレに入ったらドアを必ず閉める、外で排泄するのは気兼ねする」「大便是自分のトイレ以外ではあまりしたくなく、朝もよおさないと気になり、外出できない」「ちゃんとした硬い便であればそんなに恥ずかしいと思わないが、下痢の状態では人に見せたくない」という<人に見られたくない>考えや、「人の世話になりたくない」「オムツを当てられるのは年を取ったら避けて通れないが、できるだけ便や尿の世話にならないように頑張る」という<人の世話になりたくない>考えがあった。このように便・尿は【人に見られたくない】ものであることが語られていた。

#### 4. 考察

##### 4.1 排泄に関する意識の特徴

本研究の結果より、対象は、便・尿について、出すべき物であるという生理的現象、神の加護、健康のバロメーター、爽快感という感覚、汚さや人に見られたくない考えといった人との関係性を含めて、多面的に捉えていることがわかった。

排泄は、生理的な現象であり、また、便や尿は廃棄物なので出すべきであり、身体の生理学的な機能を活用して自分の力で便や尿を体外に排出することと、反面、体内では自分の意思では何もできず、神のおかげで排泄ができていないことに感謝をするというような考えが中核にあるのではないかと考えられた。沖縄は、戦前はフル（トイレと豚小屋が兼用になったもの）、戦後は、ドラム缶便所、汲み取り式トイレ、和式トイレ、洋式トイレと変遷していく様々なトイレに変化してきた。フルには廁神がおり、綺麗にしないと怒られると便所を綺麗にし、祈りをささげてきた信仰がある<sup>14)</sup>。フルは使用されなくなったが、神のおかげで排泄ができるという文化的な地域性が排泄の考えに残っていると考えられる。また、フルや汲み取り便所を使用していた時代は、便尿は大切な餌や肥料であり、自然のリサイクルがあったため、肯定的な意味で捉えている人が多いかもしれない。

排泄後には出た便や尿の状態を観察し、健康の状態を自分で判断、管理していることが考えられた。このことより、沖縄は、健康に関する情報が

行きわたっている社会であることが示唆される。また、便や尿が出ることで、気分が爽快になり、その後には出なくて安心であるという感覚を得ているのではないかと考えられた。石垣は、日本の習慣の中で根付いている身体感覚や価値観がある<sup>15)</sup>と述べているが、本研究でも排泄習慣において類似していた。波平は、自分の身体について、一定の観念を持ち、その身体観はそれぞれの文化によって異なっている<sup>16)</sup>と述べている。今後、心身面から、さらに明らかにしていくことが課題である。

便・尿が汚いという感覚については、衛生的に汚いと、自分や子どもの便や尿は汚くないという、自分との関係性で汚さの感覚が違うことがわかった。また、人に見られたくないという、排泄を人との関係性により考えるものであり、排泄は人から遠ざかろうとする特徴のある関係性であった。衛生的には汚い物であっても、自分に近い関係の人のものであれば、汚くなくなるということが考えられた。日本人は「人と人の間」に帰属させる特徴があるためだと考えられる<sup>17)</sup>。

排泄には清浄と汚穢の両義性があり、尿尿に対する見方を形成している<sup>18)</sup>。おなかの中にある便は汚いと思わないが、何かのきっかけで捉え方が変わったり、文化による汚さの基準の違いもある<sup>19)</sup>。本研究においても、便・尿の汚さについて両義性がみられ、子どもの頃から身につけてきた地域や個人等の文化により、違いがみられることが示唆された。

##### 4.2 文化を反映した高齢者の排泄への看護援助

本研究の結果より、排泄には、これまでその人が身につけてきた文化が反映されており、個人の理解とともに、その文化も理解することが必要であると考えられた。具体的には、排泄の援助を行うには、まず、対象の排泄に関する希望とその理由を把握するなかで、その人にとって排泄とはどのようなものかという価値観を理解することが重要でないかと考える。対象を複数の関係の中にいる個人ととらえ、また、個人の価値観には、家族や地域の価値観が影響しているため、背景となる価値観に着目する<sup>20)</sup>。排泄に関する話をするには、気兼ねがあり、自分から相談しにくい場合、こちらが援助したいという姿勢を伝えながら関わっていくことで、信頼関係が深まっていけば、対象が話しにくい内容のことで相談しやすくな

ると考えられる<sup>21)</sup>。

便・尿は人に見られたくないという高齢者の希望を尊重し、まず、本人ができるだけ長く自立して排泄が行える方向で支援することが重要である。そして、介護が必要になった場合には、人の援助を受けることが肯定的な価値観、考え方に変わっていきけるように援助できることが必要である。また、その時点での心身の状態に応じた新たな排泄習慣に変更していきけるように、本人や介護をする家族とともに排泄方法を考えていく<sup>22)</sup>。

疾患等により、本来の排泄において自分で行っていた、便や尿を出すこと、便・尿の観察による健康状態の確認、爽快感が得られることができなくなることがある。対象のこれまでの排泄習慣を把握し、これらが少しでもできる工夫が必要になるのではないかと考える。

また、不潔感や羞恥心を軽減できる援助が必要であり、対象の求める関係性を形成し、排泄物を大切に扱うことが必要である。

### 5. 本研究の限界

本研究は対象より聴取した考えを質的に記述して分析するための研究を実施した。今後は、様々な地域におけるデータを分析したり、本研究に基づいた援助を実施しながら、さらに分析、検討していく必要がある。

### 謝辞

本研究にご協力いただきました参加者の皆様、施設の代表者様はじめ職員の皆様に深く感謝申し上げます。

### 利益相反

なし

### 引用文献

- 1)川島みどり：排泄援助の専門性とは－病態考察と患者心理を軸に。看護の科学社, 88, 1998.
- 2)西村かおる：特集 在宅での排泄ケアを見直す 在宅での排泄ケアの留意点。訪問看護と介護, 3(6), 403, 1998.
- 3)辻村真由子：排泄支援。石垣和子, 上野まり編：看護学テキストNiCE 在宅看護論。南江堂, 278-286, 2012.
- 4)伴真由美, 原等子, 辻村真由子, 他5名：快便を目指すケア。中島紀恵子, 石垣和子監修：高齢者の生活機能再獲得のためのケアプロトコール。日本看護協会出版会, 135-170, 2010.

- 5)伴真由美：排便に援助を必要とする在宅要介護者とその家族の状況。千葉看護学会会誌, 10(2), 49-55, 2004.
- 6)塩見千賀子, 伊藤ちぢ代, 生島祥江, 他1名：排泄の文化的考察。神戸市看護大学短期大学部紀要, 16, 141-150, 1997.
- 7)川出富貴子：排泄習慣とその文化的側面への考察。臨床看護, 10(9), 1325-1333, 1984.
- 8)池田光穂：＜排泄＞現象の文化的考察。看護技術, 38(14), 6-9, 1992.
- 9)前掲書6), 141-150.
- 10)千葉大学大学院看護学研究科：日本文化型看護学への序章 実践知に基づく看護学の確立と展開。医学書院出版, 2008.
- 11)松浦志野, 石垣和子, 辻村真由子, 他6名：看護実践における身体性を考える。千葉看護学会会誌, 13(1), 1-6, 2007.
- 12)植田彩, 辻村真由子, 岡本有子, 他4名：排泄ケアにみられる身体性。千葉看護学会会誌, 15(1), 68-75, 2009.
- 13)平川宗隆：沖縄トイレ世替わり フール(豚便所から水洗まで)。ボーダーインク, 2000.
- 14)前掲書13), 73-80.
- 15)前掲書10), 216-218.
- 16)波平恵美子：医療人類学入門。朝日新聞社, 19, 1994.
- 17)前掲書10), 216-218.
- 18)前掲書6), 141-150.
- 19)浜本満, 浜本まり子：人類学のコンセンサス 文化人類学入門。学術図書出版社, 112-116, 1996.
- 20)前掲書10), 216-218.
- 21)前掲書5), 49-55.
- 22)伴真由美, 梶園子, 石垣和子：在宅要介護者の新たな排泄習慣の形成にかかわる看護援助。千葉看護学会会誌, 12(2), 36-42, 2006.

## Attitude Survey of Older People Living in Okinawa Regarding Excretion

Mayumi TOKUDA, Mayuko TSUJIMURA, Kazuko ISHIGAKI

### Abstract

This study aimed to clarify the attitudes of older people living in Okinawa regarding excretion, and examine the ways in which nurses provide toilet assistance while respecting their culture. We interviewed 15 older people regarding their attitudes toward excretion using a semi-structured interview method. The survey revealed a variety of meanings that are attached to urine and feces, such as "(urine and feces are) something to get rid of," "I thank God for them," "show one's health status," "make me feel refreshed," "hygienically unclean," "not dirty," and "I do not want anyone to see." These results suggested that older people living in Okinawa perceived excretion in their physical, relation to religious connections and personal, and underscored the importance of understanding the cultural aspects that form their perceptions and providing nursing care that respects such perceptions.

Keywords older people, excretion, culture, attitude, Okinawa